

## 彙報

## 心理學讀書會

一月三十日心理學實驗室に於て午後三時半より約三時間に渡つて左の如き講演があつた。

假名とローマ字

野上教授

教授は先づ、國字論に有勝な道德的ともいふべき方面からではなくして、もつと根本的に、科學的に、果して假名とローマ字と何れが、日本語其物を表はすに最も適當であるかを考へてみたいと言つて書き方及び讀み方に付て、片假名、平假名並に、ローマ字を實驗的に比較研究して之を數字及び曲線に表はし、使用上の便利の點から云つて、特に書方の速度に於て、ローマ字は到底片假名に及ぶべくもない事を示された。そして假名の缺點を辯じ、ローマ字論者の主張を難じてから、教授は此の比較論の更に重要な部分に進まれた。

それは、日本語の性質上、之を表はす文字は、假名とローマ字と何れが適當であるかといふ問題である。言ふ迄もなく文字は言語の符號である。所が日本語は元來、多くの歐洲の現代語の如く、*alphabetic* ではなくして *syllabic* の段階にあるものである。して *syllabic* の我が國語を表はすに、*alphabetic* となす *syllabic* の文字を採用すべきは無論の事である。即ち國語其物の性質上、當然、ローマ字よりも假名の方が遙かに之れを寫すに適してゐると結ばれた。

講演後、各自相論じ、鋭い批評も出て頗る饒かであつた。會する者、千葉助教、今村醫科教授、須藤三高教授を始め約二十名、讀書會としては稀に見る、盛會であつた。一同散會したのは巳に七時を過ぎてゐた。

## 社會學會

一月三十日午後六時より學生集會所に於て例會を開き左の如き講演があつた。

ミハイロフスキの主觀的方法論及社會批評の標準

馬場剛

## 月曜會

○京都文科大學哲學科出身諸學士の組織せる月曜會は都合にて暫く休會せしが、昨年十二月二十五日午後七時學生集會所に會し、先に本誌に植田學士の掲げたる論文「美術史の對象」を主題と爲して討議せり。千葉、高田、赤松、宇野、檜崎、黒田、植田、安部、山内、諸氏來會す。

○二月十日午後六時、例會を吉田町、大學基督教青年會館に開く。千葉、宇野、赤松、黒田、植田、諸氏出席し、赤松學士の「ダブー論」(本年一月本誌掲載)に就て最も雄辯なる討議を爲せり。

## 新刊紹介

文學士 高田保馬著

## 社會學的研究

本書は篤學精到な高田學士が明治四十三年以來約八年間の數多い論文中から特に十二章を擇んで築められた論集である。著者は其の所持の謙遜な態度で「自分にさへ甚だ意に滿たないもの、さぞ缺點に充ち誤謬多い事であらう」と序中述べられてゐるが由來眞摯なる社會學的述作の乏しい我學界に今著者積年の勞作の結果が形を變へ組織を加へられて公にされたといふことは我々後學にとつて云ふばかりない便宜な事である。

本書は著者が最も多くの影響を受けたギディングス氏の社會學